

松野殿御返事

建治四年二月一三日 五七歳

種々の物送り給ひ候ひ畢んぬ。山中のすま居思ひ遣らせ給ふて、雪の中ふみ分けて御
訪ひ候事、御志定めて法華經・十羅刹も知ろし食し候らん。さては涅槃經に云は
く「人命の停まらざることは山水にも過ぎたり。今日存すと雖も明日保ち難し」文。摩耶
經に云はく「譬へば旃陀羅の羊を駈って屠家に至るが如く、人命も亦是くの如く歩々死
地に近づく」文。法華經に云はく「三界は安きこと無し、猶火宅の如し。衆苦充滿し
て甚だ怖畏すべし」等云云。此等の經文は我等が慈父大覺世尊、末代の凡夫をいさめ給
ひ、いとけなき子どもをさし驚かし給へる經文なり。然りと雖も須臾も驚く心なく、刹那
も道心を発さず、野辺に捨てられなば一夜の中にはだかになるべき身をかざらんがた
めに、いとまを入れ衣を重ねんとはげむ。命終はりなば三日の内に水と成りて流れ、塵
と成りて地にまじはり、煙と成りて天にのぼり、あともみへずなるべき身を養はんと
て多くの財をたくはふ。此のことはりは事古り候ひぬ。但し当世の体こそ哀れに候へ。
日本国数年の間、打ち続きけかちゆきゝて衣食たへ、畜るひをば食ひつくし、結句人を
くらふ者出来して、或は死人・或は小兒・或は病人等の肉を裂き取りて、魚鹿等に加へ
て売りしかば人は是を買ひくへり。此の国存の外に大悪鬼となれり。又去年の春より今年
の二月中旬まで疫病国に充滿す。十家に五家・百家に五十家、皆やみ死し、或は身は
やまねども心は大苦に値へり。やむ者よりも怖し。たまたま生き残りたれども、或は影
の如くそゐし子もなく、眼の如く面をならべし夫妻もなく、天地の如く憑みし父母も
おはせず、生きても何かせん。心あらん人々争でか世を厭はざらん。三界無安とは仏説
き給ひて候へども法に過ぎて見え候。然るに予は凡夫にて候へども、かゝるべき事を仏
兼ねて説きをかせ給ひて候を、国主に申しきかせ進らせ候ひぬ。其れにつけて御用ひ
は無くして彌怨をなせしかば力及ばず、此の国既に謗法と成りぬ。法華經の敵に成
り候へば三世十方の仏神の敵と成れり。御心にも推せさせ給ひ候へ。日蓮何なる大科有
りとも法華經の行者なるべし。南無阿彌陀仏と申さば何なる大科有りとも念仏者にて無
しとは申しがたし。南無妙法蓮華經と我が口にも唱へ候故に、罵られ、打ちはられ、
流され、命に及びしかども、勧め申せば法華經の行者ならずや。法華經には行者を怨む
者は阿鼻地獄の人と定む。四の巻には「仏を一中劫罵るよりも末代の法華經の行者を悪
む罪深し」と説かれたり。七の巻には「行者を軽しめし人々、千劫阿鼻地獄に入る」と
説き給へり。五の巻には「我が末世末法に入って法華經の行者有るべし。其の時其の国
に持戒・破戒等の無量無辺の僧等集まりて国主に讒言して、流し失ふべし」と説かれた
り。然るにかゝる經文かたがた符合し候ひ了んぬ。未来に仏に成り候はん事疑ひなく覺
え候。委細は見参の時申すべし。

二月十三日

日蓮花押

松野殿御返事